分布：北海道を除く全国

メリケンカルカヤ　（　イネ　科）

学名：*Andropogon virginicus*（アンドロポゴン　ウィルギニクス）

米利堅刈萱　　別名：　特になし

主な生育場所

農村部から市街地にいたる空き地，道ばた，芝生などの草地，水田の畦畔，休耕地，水路やため池の法面など，日当たりが良く乾燥した環境下に多く見られる。刈り取り圧にも強いが湿地には少ない。

名前の由来：メリケンとは，アメリカのことを表し，カルカヤとは屋根を葺くために「刈る茅」のこと。綿毛をつける在来のススキやメガルカヤなどに似ているが，アメリカからきた外来植物を示している。

特　徴

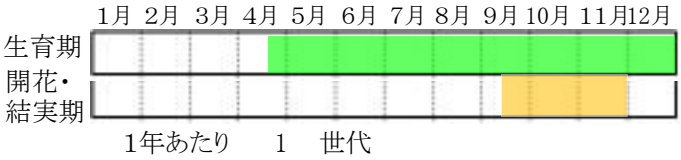
種子と根茎により繁殖する多年草。草丈は50-100cmとなり，叢生しやすいが，生長速度は極めて遅い。茎は扁平で，葉鞘にやや長い毛を散生する。9-10月頃に直立した稈を伸ばし，多数の穂をつける。長さ8mmほどの白い綿毛がついた種子は，風によって伝播する。。晩秋から冬にかけて，全草が朱色に紅葉し，枯れ草も目立つ。

＜農業との関係＞

シバの生産地では，刈り込み耐性が強く，年を経るごとに根株が強大化するため，強害雑草とされている。また，オーストラリアなどでは侵略的な外来種として扱われているなど，我が国でも今後，牧草地や畑地，果樹園などでの強害雑草化が懸念されるため，特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）により要注意外来生物に指定されている。

綿毛をつけたメリケンカルカヤ種子

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞

在来のカルカヤには，草原生のメカルガヤ（雌刈萱）とオカルガヤ（雄刈萱）とがある。種子に綿毛をつける様子が似ているが，いずれもメリケンカルカヤよりも草高が高くなり（1m以上），茎はさほど扁平にならず，小穂も大型で種子の毛も長

草原に生える在来種のメカルガヤ

＜一言うんちく＞

北米原産ですが，現在ではアジア，オーストラリア，太平洋諸島など環太平洋の各地に帰化しています。我が国では，1940年頃に名古屋市から西日本を中心に拡がり始めました。酸性土壌に強いため，化学肥料の過剰使用などによる土壌の酸化に伴い増加する可能性も指摘されています。

＜人との関わり合い＞

茅葺きの屋根をほとんど見かけなくなり，「茅」の用途がなくなりつつある中，新たな「カルガヤ」が各地で跋扈しつつある。本種の分布の拡大には，芝の全国的な流通も要因の一つとされる。いまや，晩秋から初冬にかけての身近な野辺に綿毛や紅葉が目立つメリケンカルカヤは，セイタカアワダチソウと並んで，我が国の近年の里の秋を彩る景観として定着しつつある。このようにして，里山や里地の風景も，いつのまにかアメリカなどからきた草花にとって代わられてしまうのであろう。

＜俳句や短歌への登場＞

メリケンカルカヤとしての，俳句や短歌への登場はまだみない。
屋根を葺く「茅」（メガルカヤだけでなく，ススキやチガヤなども含む）は，秋の季語として知られている。
たとえば，
わが書きし文字さへふりぬ萱薄　蝶夢　など